

教育研究業績書

2024年10月22日

所属：教育学科

資格：准教授

氏名：中植 正剛

研究分野	研究内容のキーワード
情報教育, ICT活用教育, 教育工学	情報活用能力の育成 プログラミング教育
学位	最終学歴
博士(学校教育学) Master of Arts (Education)	スタンフォード大学大学院教育学研究科 Learning, Design and Technology修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. FD研修 オンライン授業の質の向上	2020年5月16日, 20日	神戸親和女子大学。コロナ禍により全学で実施中であったオンデマンド型オンライン授業の質の向上のために悉皆研修の講師を努めた。4月から実施してきたオンライン授業について学生に聞き取り調査を行い、ベストプラクティスを抽出して、自律的学習者育成と学習の動機づけの観点から研修を行うとともに、ZOOMやMS Teamsなどのツールの活用方法、録画教材の作成方法について講習をした。
2. FD研修 オンライン授業の始め方	2020年4月9日, 10, 11, 13日	神戸親和女子大学。コロナ禍による全学的なオンライン授業の開始に向けて、専任教員・非常勤教員の悉皆研修の講師を努めた。eラーニングについての基本的な知識とともに、授業設計や学習支援方法に関する基礎的な知識、プラットフォームとして採用したMS Teamsの基本的な使い方、ZOOMの基本的な使い方について研修をするとともに、オンラインにサポートサイトを開設し、教職員の疑問や問い合わせへの回答とサポートを行った。
3. MS Teams, Google Classroomを活用したオンライン授業	2020年4月～現在	Microsoft Teams, Google Classroomを活用してオンライン授業を実施している。効果的な学習支援のためにID(教授設計理論)を用いたコンテンツ設計をすることに加えて、コロナ禍のオンライン学習での学生のモチベーションの維持に配慮して、動機づけのためのフィードバックを特に重視し、グロースマインドセットの理論に基づいてフィードバックをしている。
4. クラウド (Google Workspace for Education(旧G Suite), Office Online) の活用	2014年4月～現在	演習を始めとする各担当授業でクラウドを活用した学習支援をしている。主に、予習復習の資料提示や課題提示および回収、授業中の協働学習のために活用している。知識・理解の習得に関する予習復習を充実させることで、対面授業中はディスカッションなどの協働ワークなどを通して、より高次の学力の育成ができるようになった。
5. ICTを活用した模擬授業の指導	2012年4月～2017年3月	神戸親和女子大学。電子黒板や実物投影機などを活用した模擬授業の指導をしてきた。機器の操作だけでなく、授業場面に応じたねらいのある活用についての理解を深めることをねらいとした。最終年度は、クラウドを活用した模擬授業や、児童生徒の情報活用能力の育成をねらいとした模擬授業についての指導に重点を置いていた。
6. ルーブリックを用いたプレゼンテーション・レポート指導	2010年4月～現在	各授業において、プレゼンテーションやレポート作成の技法について、ルーブリックを活用して指導している。プレゼンテーションのルーブリックは関西国際大学、比治山大学、神戸親和女子大学の3大学連携GP(グッドプラクティス)において開発されたものを改良して利用した。
7. LMS Moodleを活用したハイブリッド授業	2006年4月～2010年3月	担当科目にて、LMS Moodleを使った学習支援システムを活用した授業を展開した。授業内の確認テストや復習のためにオンデマンドの学習活動を取り入れた。
8. 初年次教育の統一シラバスカリキュラムの開発	2006年4月～2008年3月	神戸親和女子大学。初年次教育を全学共通のカリキュラムで実施するために、担当者としてカリキュラムを

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
9. ウェブ教材の活用	2004年4月～2014年3月	開発。ノートテイキング、プレゼンテーション、レポートや論文の書き方、図書館ツアーなど、大学での学習と生活に必要な事項が学べるようにした。過去に担当した情報処理関係の各科目で、毎回の教材と練習問題をウェブ上に公開。授業で活用するだけでなく、授業の内容に応じて自学自習・復習できるようにした。2015年度以降は主にLMSで教材配布をすることとした。
2 作成した教科書、教材		
1. 教育とICT デジタルコンピテンシーの統一教材	2023年4月～	教育学科「教育とICT」（1年生必修）を担当者4名で実施しているため、統一教材を開発。教育者として必要なデジタルコンピテンシーの基礎のうち、テクノロジーの基礎知識、コミュニケーションと協働、安全とセキュリティ、デジタルコンテンツ制作について、個別およびペア・グループで学ぶ教材。
2. データリテラシーと教育 オンライン教材	2022年4月～	オンデマンド型オンライン授業と対面授業で活用するオンライン教材を作成。データリテラシーと統計の基本、および小学校・中学校におけるデータ活用領域の指導について、独学で学べるように、教授設計技法（ID）を用いて作成した。随時内容更新。
3. 教育方法の理論と実践（初等）オンライン教材	2021年9月～	オンデマンド型オンライン授業で活用する教材を作成。授業設計、学習評価、指導案の書き方や等の教育方法や、初等中等学校における情報教育とICT活用教育について独学で学べるように、教授設計技法（ID）を用いて作成した。随時内容更新。
4. Microsoft TeamsとZOOMを活用したオンライン授業スタートガイド（教員向け、学生向け）	2020年4月	神戸親和女子大学。新型コロナ禍により全学的に2020年度春学期をオンライン授業で始めるにあたり、教員向けにはオンデマンド型授業と同時双方向型授業の授業設計及び学習支援の方法とプラットフォームの使い方について、学生向けにはオンデマンド授業および双方向同時型授業とプラットフォームの使い方についての教材を作成。教員向けにはFD研修（述べ12時間）を実施した際に使用。学生向けには動画教材を作成してオンラインに掲載。
5. 教育方法・技術論（初等）オンライン教材	2020年4月	神戸親和女子大学。オンデマンド型オンライン授業で活用する教材を作成。授業設計、学習評価、指導案の書き方等の教育方法や情報教育について独学で学べるように、教授設計技法（ID）を用いて作成した。
6. ビジュアルプログラミング言語スキルアップ教材	2016年4月～	プログラミング教育で必要とされるビジュアルプログラミング言語ScratchとViscuitについて理解を深め、プログラミングのスキルアップをするための教材を作成。担当授業であるキッズメディア（神戸親和女子大学）、教育プログラミングにて活用。随時内容更新。
7. 校務の情報化独学教材	2014年4月	校務の情報化に必要な、ワード、エクセル、パワーポイントなどのコンピュータのスキルを向上させるための独学教材を作成。クラウドで共有。教員採用セミナー等で配布・実施。
8. 情報基礎II eラーニングユニット教材	2010年4月	神戸親和女子大学基礎演習IIで使用するeラーニングのユニットテキストのうち3ユニットを作成 1) 相対参照絶対参照 2) 関数入門 3) 関数中級
9. 情報基礎I eラーニングユニット教材	2007年4月	神戸親和女子大学情報基礎Iで使用するeラーニングのユニットテキストのうち7ユニットを作成 1) ガイダンスと学習のすすめかた 2) ファイルを上手に管理しよう 3) インターネットを安全に使おう 4) 情報モラル 5) パワーポイントでプレゼンテーション 6) パワーポイントでプレゼンテーション 7) オフィスで描画しよう
10. JAVAプログラミング 入門編・初級編 ウェブ教材	2006年4月	プログラミング言語JAVAの入門者むけ自学自習用のウェブテキストを作成・公開。授業30回分。構造化プログラミングおよびオブジェクト指向プログラミング

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
11. コンピュータグラフィックスの基礎 ウェブ教材	2005年4月	とデータ構造について。神戸親和女子大学情報研究CIおよびCIIで使用。 マルチメディア論で使用する自学自習用のウェブテキストを作成・公開。コンピュータグラフィックスの基礎理論およびPOV-Rayを使ったCGの作成について。神戸親和女子大学。15回分
12. College Trackサマープログラム	2002年12月	カレッジトラックはカリフォルニア州イーストバロアルトにあるアップル社が出資するNPO。高校一年生向けの6週間の夏期オリエンテーションプログラムのテキストと指導書を作成。中学を卒業したばかりのファースト・ジェネレーションの新入生が自らのアイデンティティの発見と仲間とのコミュニティーづくりを行うことができるようになっている。2003年夏期より同団体で実施
13. 私立同志社国際中学・高等学校 読書感想文共有システム、レポート共有システムの開発	2001年4月	同志社国際中学高等学校にて、読書感想文共有システム、レポート共有システムなどの教育用LMSをPHPとPostgreSQLを用いて開発。生徒が自分の読書感想文やレポートなどをアップロードし、相互にアップロードされた作品を評価できるようなシステム。総合的な学習の時間及び英語、国語などの各教科において、対話的な学習の促進を目的として活用。実践を学研「New教育とコンピュータ」で発表した。
14. コミュニケーションセンターユーザーズガイド	2000年4月	同志社国際中学高等学校の探究学習を支援するためのテキスト。探求学習においてメディアセンター兼図書館であるコミュニケーションセンターの活用方法やコンピュータやインターネットの活用方法に加えて、メディアリテラシーについて学ぶための教材。同校のコミュニケーション&メディア（1年生必修）の授業でテキストとして活用。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 私立高校での総合的な学習の時間の授業、LMS開発	2000年4月～2002年5月	私立同志社国際中学・高等学校にて、教育用LMSを開発。総合的な学習の時間及び各教科において、対話的な学習の促進を目的として活用。科目「コミュニケーション&メディア」で、メディアを活用したプロジェクト型の学習をチームティーチングで指導。
4 その他		
1. 丹波市小学校情報・統計教育部会教科担当者研修会 講師 『書く』こととICT活用	2023年2月	GIGAスクールにおける「書くこと」を充実させるためのためのタイピング指導について
2. 丹波市立春日中学校 教員研修講師	2022年9月	欧州委員会のDigCompの観点から見た、1人1台端末時代の授業デザインについて。
3. 私立学校初任者研修小学校（西日本地区）研修会講師	2022年7月	1人1台端末時代の日常活用の基盤づくりとDigCompから見た情報活用能力の育成について。
4. プログラミング教育。子育てで親育て。コープステーション2月号、灘神戸生協	2022年2月	プログラミング教育に関する、「プログラミング教育が目指すのは、コンピュータの理解と論理的思考の育成。さらに情報社会に求められるのは」というテーマのインタビュー記事
5. 丹波市小学校情報・統計教育部会教科等担当者研修講師 学習指導要領の資質・能力の実現に向けたICT活用	2022年2月	アンダーソンのタキソノミーテーブルの観点から見た、学習指導要領の主體的・対話的で深い学びの実現におけるICT活用について。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
6. 芦屋市立朝日が丘小学校 校内研修講師 GIGA 1人1台端末時代の教育	2021年8月	1人1台端末の活用について、日常を基盤とした活用、情報活用能力の実践力の育成をウェルビーイングの観点から講演。
7. 芦屋市立浜風小学校 校内研修講師 プログラミング教育を始めよう	2021年8月	小学校におけるプログラミング教育の意義と育成すべき資質・能力について、演習を交えて解説。
8. 私立学校初任者研修小学校（西日本地区）研修会講師 「学習指導要領の実践プログラミング教育を始めよう」	2021年7月	小学校におけるプログラミング教育の導入について、情報活用能力育成とコンピューテーショナルシンキング育成の観点から実習を交えて講演。
9. 丹波市情報教育担当者研修会講師 「GIGA、一人一台の日常活用の充実」	2021年6月	参加者が情報活用能力育成の内容とその重要性について所属校で納得感を伴って説明できるように、我が国のICT活用の現状、GIGAスクール構想における日常的活用の位置づけと意義、SAMRモデル、ICT活用の事例を紹介。
10. 丹波市小学校視聴覚教育部会教科等担当者研修講師 プログラミング教育の充実と継続～そしてGIGAスクール～	2021年3月	プログラミング教育の継続的な実施について、GIGAスクールのSAMRモデルの中にプログラミング教育をどのように位置づけるかなど、これまでの実践事例と情報活用能力の観点から解説。
11. 兵庫県立長田商業高等学校 校内研修講師 1人1台時代の学校教育	2021年1月	ICTを用いたアクティブ・ラーニングによる授業づくりについて、分厚い「日常使いの基盤」と情報活用能力の育成からのアプローチを解説。
12. 丹波市内小中学校校長会 研修講師 GIGAスクールと教職員の意識改革	2020年10月	GIGAスクールの背景と意義について解説し、教職員の意識改革のために必要な視点について説明。
13. 芦屋市教育委員会芦屋市教育研究部会 研修講師	2020年9月	プログラミング教育の導入とGIGAスクール構想について、導入の背景を解説し、今後の情報活用能力の位置づけとあり方について講演。
14. 私立学校初任者研修小学校（西日本地区）研修会講師	2019年8月	プログラミング教育の継続的な実施について、GIGAスクールのSAMRモデルの中にプログラミング教育をどのように位置づけるかなど、これまでの実践事例と情報活用能力の観点から解説。
15. 学校法人親和学園 親和教育研究所 研修講師 これからの情報教育とICTの活用について	2018年12月	日能研等の塾・予備校関係者と親和女子中学高等学校教員向けに、1人1台のICT必携時代に向けた授業改革について講演するとともに、意見交換の座長を務めた。
16. 私立須磨浦小学校 校内研修講師 プログラミング教育とカリキュラムづくり	2018年12月	プログラミング教育の導入の方法と1人1台のICT必携化についての講義とともに、ワークショップを実施して、体験的にプログラミング教育で育成すべき資質・能力と情報活用能力の育成について理解ができるようにした。
17. 芦屋市立宮川小学校 校内研修講師 プログラミング教育の開発と実践	2018年10月	兵庫県教育委員会によるプログラミング教育モデル構築事業の研究校に対して、各教科におけるプログラミング教育の開発と実践についての講演と指導助言、および情報機器とプログラミングソフトについての技術的な指導助言をした。
18. 丹波市教育委員会 平成30年度 情報教育サマーセミナー プログラミング教育体験講座	2018年8月	丹波市教育委員会による現職教員向けの研修講座の講師を務めた。プログラミングロボットOzobotを活用して、プログラミングの基本を理解するとともに、授業づくりやカリキュラムの構築の方法について講義をした。
19. 神戸市立六甲アイランド高校 英語科授業研究指導助言	2018年8月	英語科でアクティブラーニングを推進していくための校内授業研究のデザインとコーディネートの方法について指導助言を行った。教頭先生と共に企画をして研究授業を実施し、指導助言者として事後協議に参加。生徒たちの実態や反転授業の実施方法について助言をした。
20. 丹波市教育委員会指導主事研修 プログラミング教育体験 講師	2018年2月	丹波市教育委員会の指導主事を対象に、次年度からのプログラミング教育の現場研修や市としてのモデルカリキュラムづくりに向けて、体験型の研修を実施。
21. 私立親和女子中学校・高等学校 アクティブラーニング 授業研究指導助言	2017年11月	高等学校におけるICTを活用したアクティブラーニングの推進をテーマに、年間を通して授業研究の計画立案を支援しつつ、校内研究授業において指導助言を行

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
22. ローマ日本人学校教員研修（新学習指導要領とプログラミング教育）講師	2017年9月	なった。各教科における生徒中心の授業への改善に加えて、高等学校の新学習指導要領で導入される総合的な探究の時間に向けた探究型の学びのすすめ方についての助言を行った。 新学習指導要領の背景と育成すべき主体的・対話的で深い学びの実現をテーマとして話題提供しつつ、プログラミング教育についての背景とねらいを演習を交えて講演。
23. 私立同志社小学校 校内研修講師（プログラミング教育）	2017年8月	プログラミング教育導入の背景、育成すべき資質・能力等を演習を交えて講演。さらに、同志社小学校における情報活用能力の育成についての現状の分析と今後の方向性について講演。
24. 芦屋市教育委員会 平成29年度ICT活用夏季研修講座講師 プログラミング教育入門	2017年7月	プログラミング教育導入の背景、育成すべき資質・能力等について講演。実技を入れて体験的にプログラミング的思考が学べるように工夫した。
25. 神戸市立六甲アイランド高校 授業研究指導助言	2017年7月	校内授業研究そのもののデザインとコーディネートの方法について指導助言。6つの研究授業を観察し、各授業のICT活用について協議会にて助言。
26. 神戸市立六甲アイランド高等学校 英語科授業研究指導助言者	2017年2月	アクティブラーニングを推進するための英語科で授業研究について指導助言者として参加。事前に事後協議会のディスカッションのデザインを助言するとともに、ネイティブによるクラスなど6クラスを参観して事後協議会でコメント。
27. 芦屋市立精道小学校 ゲスト講師 「小学校6年生を対象としたプログラミング教育 ～スクラッチをつかって～」	2017年1月	小学校6年生3クラスを対象として、ビジュアルプログラミング言語Scratchを使用してプログラミング的思考を育成するための授業を行った。
28. 兵庫県教育委員会播磨西教育事務所 研修会講師 「プログラミング教育ことはじめ」	2016年11月	プログラミング教育の導入の背景と育成すべき資質・能力について講演するとともに、ビジュアルプログラミングツールを用いて実習を行った。
29. 神戸市立六甲アイランド高等学校 校内研修講師 「授業改善に向けたアクティブラーニング」	2016年10月	アクティブラーニングの背景や理論を紹介するとともに、アクティブラーニング推進のための授業研究のあり方について講演。
30. International Tour 講演 「神戸親和女子大学附属幼稚園の教育(2)」, Annual Conference of International Association of Lab Schools@コロンビア大学附属校	2016年4月	コロンビア大学附属の小学校(The School at Columbia University)において、神戸親和女子大学の幼稚園の教育の特色を軸に、日本の幼稚園教育についての概要を講演。
31. 京都私立小学校連合会夏期研修会講師 「ICT教育の歴史と現状 今後の課題」	2015年8月	1990年代からの学校教育におけるICTを活用した教育の歴史について概観するとともに、1人1台時代を睨んで情報活用の実践力をどのように育てていくのかについて、課題と展望を講演
32. International Tour 講演 「神戸親和女子大学附属幼稚園の教育(1)」, Annual Conference of International Association of Lab Schools@シカゴ大学実験校	2015年4月	シカゴ大学実験校において、International Association of Lab Schoolsのメンバー校からの参加者に、神戸親和女子大学附属幼稚園の教育理念と実践について講演。
33. 尼崎市小学校情報教育研究会研究発表会講演 「アクティブ・ラーニングとICT活用のすすめ」	2015年3月	アクティブラーニングを通して情報活用の実践力の育成を狙うICT活用について講演。
34. カナダ トロント大学附属小学校(JICS Lab School)校内研修 講師 「算数における授業研究の改善」	2011年9月	トロント大学附属のJICS Lab Schoolの教員を対象として、授業研究(Lesson Study)で、児童の思考をどのように可視化して協議をすすめるかといのかについて講義。
35. 丹波市立前山小学校校内授業研究会講師（2回）	2011年8月～2011年12月	算数科における思考力を深めるためのノート指導とICTの活用、および授業研究の質の向上について指導助言。メタ認知力を高めるためのふき出し法とOHCを活用した指導を推進するとともに、ワークショップ型の授業研究協議会により、児童の認知的活動に焦点をあてた授業改善に取り組んだ。
36. 丹波市立鴨庄小学校校内授業研究会講師（2回）	2011年6月～2011年11月	算数科における思考力を深めるためのノート指導とICTの活用、および授業研究の質の向上について指導助言。メタ認知力を高めるためのふき出し法とOHCを活用した指導を推進するとともに、ワークショップ型の授

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
37. 丹波市立鴨庄小学校 校内授業研究会講師 (2回)	2010年11月～2010年12月	業研究協議会により、児童の認知的活動に焦点をあてた授業改善に取り組んだ。
38. 丹波市立前山小学校 校内授業研究会講師 (計4回)	2010年6月～2010年10月	算数科における思考力を深めるためのノート指導とICTの活用、および授業研究の質の向上について指導助言。メタ認知力を高めるためのふき出し法とOHCを活用した指導を推進するとともに、ワークショップ型の授業研究協議会により、児童の認知的活動に焦点をあてた授業改善に取り組んだ。
39. カリフォルニア州メンローパーク市エンチナルスクール授業研究指導助言者	2009年3月～2010年8月	日本式の授業研究 (Lesson Study) による小学校算数科の授業改善と研究授業についての指導助言を行った。児童が対話的に取り組む授業設計と児童の認知的活動に焦点をあてた授業観察についての助言を継続的に行った。
40. スタンフォード大学 H-STAR (Human Sciences and Technologies Advanced Research Institute) 研究員	2008年9月～2009年8月	
41. 芦屋市教育研究部会 委託研究員による情報教育部会「情報モラルを高める授業づくり」 助言者	2007年7月	情報モラル教育のカリキュラム作成のための児童の情報機器環境実態調査の実施とカリキュラム作成の指導助言
42. 文部科学省委託事業 ID手法を用いたリハビリテーションの e ラーニング 教材開発および遠隔教育のプログラム開発, 講師	2006年8月	リハビリテーションの専門学校教員によるID手法を用いたeラーニング教材の開発において、IDの理論とその適用について助言。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. Scratchで学ぶプログラミングとアルゴリズムの基本 改訂第2版	共	2019年3月	日経BP社	中植正剛, 太田和志, 鴨谷真知子。Visual言語Scratchを使って、プログラミングとアルゴリズムの基礎を理解する。Scratchの 3.0へのバージョンアップにあわせて内容を全面改訂。学習設計技法であるインストラクショナルデザインの理論を使って書籍の内容を設計した。プログラミング作成についての汎用的な知識、構造化プログラミング、再帰処理、オブジェクト指向プログラミングの基本、サーチやソートアルゴリズムなどのアルゴリズムや、アルゴリズムのトレースを通じたプログラムの確認とデバッグについての知識が深められる。中植は全章の執筆を担当。
2. よくわかる! 教職エクササイズ6 学校教育と情報	共	2018年2月	ミネルヴァ書房	宇治原祐之, 中植正剛, 深見俊崇, 松山由美子, 吉田智子 (50音順)。学校教員が学校現場でICTを活用できる総合的な能力を育成するための入門書。中植は第2～3講, 第13～14講を担当。
3. マインクラフトプログラミングブック ComputerCraft対応	共	2016年9月	マイナビ出版	寺園聖文, 中植正剛。ものづくり冒険ゲーム: マインクラフト (Minecraft) の世界をより深く楽しむためのプログラミングを解説。コンピュータクラフト (ComputerCraft) は、マインクラフトにコンピュータやタートル, ポケットコンピュータを追加した世界である。これらは自分で「プログラム」を作成し思い通りに動かすことができるので、今まで自分の手でやっていたことをまかせることができる。マインクラフトをもっと楽しみたい読者や、はじめてプログラムに取り組む読者のためにわかりやすく解説している。中植は全体の監修を担当。
4. Scratchで学ぶプログラミングとアルゴリズムの基本	共	2015年11月	日経BP社	中植正剛, 太田和志, 鴨谷真知子。プログラミングとアルゴリズムの基礎、および「Scratch」の使い方を学ぶ。プログラミング環境「Scratch」の操作方法を身につけて自由自在に使いこなせるようになるだけでなく、頭の中で考えているアイデアをプログラムとして実現するスキル、つまり論理的な思考のスキルを身につけることを目的としている。中植は序章, 第1章1.1, 第2章, 第4章～第9章担

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				当。
2 学位論文				
1. 国際的なデジタル・メディア活用コンピテンシーの枠組みに基づく高等学校における情報活用能力育成のあり方に関する実証的研究	単	2024年9月	兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科	国際的な枠組みによって提案されているデジタル技術や情報メディアの活用能力に関するコンピテンシー（デジタル・メディア活用コンピテンシー）の概念を用いて、我が国の情報活用能力の概念や要素を捉え直し、生涯学習の観点から、その育成のあり方について高等学校を中心に検討した。研究課題は、(1)欧州委員会のDigCompとユネスコのメディア情報リテラシー（MIL）の概念と要素のコンピテンシーの観点からの整理、(2)それらを用いた日本の情報活用能力の比較分析、(3)DigCompとMILに基づいた高校生を対象とした自己評価尺度の開発、(4)実践授業の評価である。研究は10章構成で、各章で課題に対応した分析と実践を行い、結論として生涯学習の視点から情報活用能力の新たな枠組みと育成方法を提案した。実践授業の結果として、デジタル・メディア活用コンピテンシーの学習方略やその適用例の提示が学習継続価値の認識に影響することが示された。
3 学術論文				
1. デジタル・メディア活用の自己調整学習力と学習継続価値の形成を支援する学習指導の展開	共	2025年	教育情報研究, 40 (1), 日本教育情報学会 (査読有) (採録決定済)	中植正剛, 森山潤。高校生を対象に、欧州委員会のDigCompとユネスコのメディア情報リテラシーの枠組みから整理した、デジタル技術およびメディア活用のコンピテンシーについて、生涯学び続ける力を育成するため、自己調整学習を取り入れた実践授業を試行した。3つの学習課程から各自1つを選ばせ、授業中に学習方略の指導を行い、課外で自己学習に取り組みさせた。その結果、生徒は、自己調整的に学ぶための学習方略を獲得し、コンピテンシーを継続的に学習する価値を認めるようになった。学習継続価値に対しては、汎用的な学習方略を提示した資料のわかりやすさ、学習内容に応じた学習方略やその適用例を提示した資料が影響していることが示唆された。学習方略について、問題解決過程に関するメタ認知的方略、他者との協働、AIの活用などのリソース管理についての学びが見られた。コンピテンシーの自己評価の伸びは、コースによって差があったため今後の検討課題となった。中植は研究の計画、実践授業の実施、調査の実施と結果の分析、論文執筆を担当。
2. 高校生版メディア情報リテラシー自己評価尺度の開発	共	2023年12月	日本産業技術教育学会誌, 第65巻, 4号, pp. 107-116 (査読有)	中植正剛, 森山潤。ユネスコのメディア情報リテラシーの評価の枠組みで示されたコンピテンシーを高校生が自己評価するための自己評価尺度を開発し、信頼性と妥当性を検証した。958名の高校生を対象に、ユネスコの「MIL評価の枠組み」に基づいて尺度を構成し、調査を行った。確認的因子分析の結果、2次因子モデルが良好に適合した。内部整合性は許容範囲内であった。さらに、メディア・リテラシーと情報リテラシーの学習経験の違いによって尺度得点の平均に差が見られた。これらにより、構成概念妥当性が確認された。また、山本らのウェブアクセスリテラシーを外部基準として基準関連妥当性が確認された。以上の結果により、高校生版メディア情報リテラシー自己評価尺度は概ね妥当であると結論づけられた。中植は、研究の計画、調査の実施と結果の分析、論文執筆を担当。
3. 欧州委員会のDigCompに準拠した高校生版デジタルコンピテンシー自己評価尺度の開発	共	2023年10月	教育システム情報学会誌, 40 (4), pp. 281-294 (査読有)	中植正剛, 森山潤。欧州委員会のDigCompフレームワークに準拠した、高校生向けのデジタルコンピテンシー自己評価尺度を開発した。原尺度としてCliffordほかによるDigCompSATを用いた。確認的因子分析により、DigCompの5領域に対応するbifactorモデルへの適合が見られた。20項目に縮約された尺度でもモデルは維持され、信頼性と妥当性が確認された。本尺度は、一般因子に関連する得点を「デジタルスキルのプロフィール」、群因子に関連する得点を「各領域のプロフィール」としてフィードバックする。開発した尺度を用いることで自身のデジタルスキルを包括的かつ詳細に理解することが可能になり、デジタルコンピテンシーの自己評価によって個々の学習課題や成長の方向性をより明確に捉えられることが期待できる。中植は、研究の計画、調査の実施と結果の分析、論文執筆を担当。
4. ユネスコのメディア	共	2022年9月	情報コミュニケー	中植正剛, 森山潤。我が国の情報活用能力について、IE-School体系

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
情報リテラシーとの比較に見るIE-School体系表に示された情報活用能力の指標の特徴			シオン学会誌 18 (1), pp.4-22 (査読有)	表をユネスコのメディア情報リテラシー(MIL)と比較し、その特徴と課題を検討した。その結果、問題解決と探究を目的とした情報リテラシーの領域は共通しているが、IE-School体系表では、取得した情報の分析と整理についての具体的に詳細な記述が多い一方で、情報の検索、検証、妥当性や信頼性の吟味については抽象的な記述にとどまっていた。また、知識社会におけるエンパワーメントや社会参加、民主的で多様な社会を支える市民の基礎的なコンピテンシー育成という観点が見られず、批判的思考力の育成についての記述が具体的ではないこと、メディア・リテラシーに関連する要素が見あたらないことが明らかになった。最後に、IE-School体系表には要素の抽象度に一貫性が見られないため、階層的なコンピテンシーモデルとして再検討する必要性が示唆された。中植は、研究の計画、コンピテンシーの概念と要素の観点からの分析と解釈、論文執筆を担当。
5. PC必携開始学期における新入生のICT利用実態	共	2022年2月	神戸親和女子大学研究論叢, 55, pp.29-37	中植正剛, 間瀬泰尚, 酒井純. 学生たちに最低限のデジタルコンピテンシーを育成して社会に送り出すという社会的な要求への対応としてBYODによるパソコンの必携化が始まった。本研究では、必携化開始直後の一年生のパソコンの利用実態に関する質問紙調査を実施して、その成果と課題を検証した。その結果、9割以上の学生がほぼ毎日パソコンを大学に持参しており、対面授業がある日にはほぼ8割の学生が1時間以上活用するなど、必携化の最初の目的はある程度達成されたことが明らかになった。一方で、学科ごとや初年次演習のゼミごとに活用のばらつきが見られることが課題であることがわかった。中植は研究計画立案、調査用の質問紙の作成、調査の運営、データの収集と分析、論文の執筆を担当。
6. 情報活用の実践力育成の為に2次元マップを用いた授業設計についての考察 ~ 「NEL 版デジタルタキソノミー」 「豊かな学びマップ」を取り上げて~	単	2022年2月	神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報, 5	初等中等教育の情報活用の実践力育成のための授業設計方法について、研究課題を展望するために、2次元の俯瞰的マップを用いた授業設計方法である田中康平のNEL版デジタルタキソノミー、加藤直樹ほかの豊かな学びマップを取り上げ、それらの特徴と課題を検討した。その結果、学習の段階を配した2次元マトリックスが授業設計者の意識を高次の学びへと誘導するアフォーダンスを内包していること、それによって導かれた授業設計を完遂するには補助的なツールが必要であることが示唆された。デジタルタキソノミーでは、知識次元の軸を用いた立体的な学びの捉え方により、学習目標の内容的局面が明確化できるだけでなく、問題発見・解決能力の育成や学習指導要領の構造との関連づけの可能性が示された。豊かな学びマップのテクノロジー活用の軸が高次の学びの設計を支援するためには、SAMRモデルを基にした実践事例の開発や、学習者によるテクノロジー利用事例の蓄積など、さらなる研究の進展が望まれることが明らかになった。
7. 欧州委員会のDigComp 2.0と2.1との比較から見た我が国の情報活用能力の特徴	共	2021年12月	情報コミュニケーション学会誌 17 (2), pp.14-27 (査読有)	中植正剛, 森山潤. 情報活用能力及びその体系表例について、欧州委員会のDigComp 2.0と2.1と比較し、その特徴と課題を明らかにした。その結果、情報活用能力は学校教育の教育課程編成との親和性が高い一方で生涯教育や雇用・労働との関連が見られないことに課題があること、情報技術の活用だけでなく問題解決的な認知活動全般を対象としているため、抽象度が高く対象範囲が広いことに特徴があり、教科等の多様な学習活動との関連づけが容易になる反面、情報技術の活用の視点からは、市民としての基礎的なデジタルコンピテンシーの段階的な育成や保証に課題がみられることが明らかになった。また、情報技術を活用したコミュニケーションと協働に関する要素やシティズンシップに関わる要素が少なかった。今後の幼児教育・初等教育・中等教育における情報活用能力の育成におけるカリキュラム・マネジメントの検討において、文部科学省の体系表例に加えてDigComp 2.0と2.1から見た関連要素を加味することが望ましいことが示唆された。中植は、研究の計画、コンピテンシーの概念と要素の観点からの分析と解釈、論文執筆を担当。
8. 新型コロナ禍を契機としたオンライン授業体制の構築と運用	共	2021年3月	学校法人親和学園親和教育研究所研究紀要, 3, pp.3-	中植正剛, 間瀬泰尚, 酒井純. 新型コロナウイルスの感染拡大により、全学でオンライン授業を実施した。本稿では、オンライン授業体制の構築と春学期の運用について、オンライン授業の実施にあ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
9. 欧州委員会の DigComp 2.0, 2.1 におけるデジタルコンピテンス概念の整理	共	2021年2月28日	22 神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要, 6, pp. 29 - 49	たつて設置された 遠隔授業ワーキンググループの立場からの記録と考察をすすめた。新型コロナ禍にともなう緊急事態宣言発令前後には、初動期として、プラットフォームの必要な部分を整備しつつ、全体的なオンライン授業の方針策定、教職員・学生向けの研修の企画・実施を行った。学期開始後はアンケート調査等で実態をつかむとともに、FDを実施して授業の質向上に努めた。学期末のアンケート調査の結果、本学のオンライン授業については概ね 良好な成果をあげており、ポストコロナの恒常的なオンラインの活用に向けての資産となる経験が大学として蓄積されたことが確認された。中植は研究計画立案、記録の収集、記録の分析、分析結果と解釈の協議、論文の執筆を担当。 中植正剛, 森山潤. 欧州委員会によるデジタルコンピテンスの構成概念と習熟度のフレームワークであるDigComp2.0と2.1を取り上げ、デジタルコンピテンス概念の整理を行った。その結果、DigComp2.0と2.1がシティズンシップの育成と社会的インクルージョンの実現という社会文化的な理念を基盤としていること、情報リテラシーとメディアリテラシーの2つの領域にまたがったコンピテンスを視野に入れていること、習熟度の区分けの基準にコンピテンスとしての特徴が明確に現れていることが明らかになった。中植は研究の計画、調査の実施、コンピテンスの概念と枠組みの分析、論文執筆を担当。
10. Withコロナ時代の大学教育の構築に向けて：遠隔授業に対する学生アンケート結果から	共	2021年2月	神戸親和女子大学研究論叢, 54, pp.9 - 28	辻川典文, 間瀬泰尚, 酒井純, 中植正剛. 2020年度のコロナ禍での非同期オンデマンド型のオンライン授業への学生の取り組み方や、学生から見た利点・問題点、また授業実施方法の改善などを目的として、遠隔授業に対する学生へのアンケート調査を実施した。分析の結果、オンライン授業に対してある程度の満足度と授業内容の理解度を得られていること、課題に取り組む時間としては本来の授業時間を満たしているとは言えない一方で、学生にとっては課題の負担がやや大きくなっていることがわかった。また授業の満足度を高める要因として、自分のペースで学習を進められることや自宅で落ち着いて学習できること、復習を何度もできることなどをあげることができた。そして授業方法として、動画教材を用いた授業の展開への期待が大きいとともに、一定のルールや方針に従った一貫した授業デザインが必要なことも分かった。中植は研究計画立案、質問紙作成、データ収集、分析結果の協議を担当。
11. コロナ禍のオンライン授業で明らかになった女子大学生の情報機器環境	共	2021年2月	神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報, 4, pp.103 - 109	中植正剛, 間瀬泰尚, 酒井純. 2020年のコロナ禍によるオンライン授業に対応するため、S女子大学の全学生を対象に情報機器環境の悉皆調査を実施した。分析の結果、家庭や下宿のインターネット回線環境について、90.9%の学生が問題なくテレビ会議システムを利用した双方向型の授業を含むオンライン授業を受けられることができると回答した。一方で、パソコンの所持については、自分専用のパソコンを持っている学生は66.7%にとどまり、家族との共用パソコンを使用している学生が28.9%、パソコンを所持していない学生が4.5%であった。オンライン授業に対応するために自分専用のパソコンを新たに手配した学生は3.1%であったため、1人1人環境の実現に対してオンライン授業の開始はそれほど影響がなかった。中植は調査計画、調査運営、データ分析、論文執筆を担当。
12. 新型コロナ禍で見直す大学の授業の在り方：オンライン授業に関する教員アンケート結果から	共	2021年2月	神戸親和女子大学国際教育研究センター紀要, 6, pp. 19 - 28	間瀬泰尚, 中植正剛, 酒井純. 2020年度の大学の授業は新型コロナウイルスによる感染症の拡大に対応するため、全面的に遠隔授業として開始することとなった。そうした事態に対して教員はどのように対応したのか、また自分たちが実施した遠隔授業の内容や学生の対応をどのように評価しているのかを知るためにアンケート調査を実施した。その結果、教員は全体として自身の遠隔授業に対して及第点を与えているということ、教員には遠隔授業のメリットデメリットが見えてきたこと、教員へのサポート体制の重要性が明らかとなった。こうした知見を共有しニューノーマル時代に向けた教育改善を行うことが今後の課題となる。中植は研究の計画、調査の実施、調査結果の分析、論文執筆を担当。
13. ユネスコのメディア	共	2021年2月	神戸親和女子大学	中植正剛, 森山潤. ユネスコによるメディア情報リテラシー (MIL)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
情報リテラシーにおけるコンピテンシー概念の整理			教職課程・実習支援センター研究年報, 4, pp.111-127	の評価の枠組みを取り上げ、そこで提示されている MILコンピテンシーを分析してコンピテンシー概念の整理を行った。その結果、① MILコンピテンシーが、多様な社会的レベルにおける評価で戦略的に活用されること、②メディア・リテラシーの特徴が色濃く現れていること、③コンピュータ・サイエンスやエンジニアリングなどの技術リテラシーの視点が弱いこと、④習熟度に応じたレベル分けが明示されており、コンピテンシーの概念から見た特徴が明確に現れていること、などの特徴が把握された。中植は研究の計画、調査の実施、コンピテンシーの概念と枠組みの分析、論文執筆を担当。
14. 初等中等教育におけるプログラミング教育の教育的効果についての考察	単	2017年3月	神戸親和女子大学児童教育学研究, 36, pp.97-110	初等教育でプログラミング教育が必修化されることとなったが、児童・生徒に育むべき資質や能力については十分に明確化されておらず、広い合意が得られているとはいえない。本稿ではこの点を課題として捉え、今後のプログラミング教育の推進および教員養成における指導力の育成に資するための基礎的な知見を得ることを目的として、先行研究や先行する見解を整理・検討しつつ、プログラミング教育の教育的効果を明確化するため、プログラミング教育において培われる資質・能力を整理した
15. 幼児期における図形模写能力の発達に関する研究 —カナダと日本の子どもにおける図形模写能力比較—	共	2015年3月	神戸親和女子大学国際教育研究センター 紀要, 1, pp. 51-55	石岡由紀、中植正剛。幼児期における図形模写能力の発達について、Santucciや山口による先行研究で用いられた図形模写の課題を、1枚の用紙にマトリックス状に配置することで、模写の正確さとともに図形間の相対的位置に関する認知の発達を、図解配置の一致率について検討する課題として提示した。カナダの幼児においても、日本の結果と同様に、模写の正確さは年齢と相関しており、図形の位置の一致率にも年齢との比較的強い相関が見られた。中植は論文の校正を担当。
16. Japanese adolescents' disclosure and information management with parents.	共	2014年5月	Child Development 2014 May, 85(3), pp. 901-7 (査読有)	Nucci L., Smetana J., Nakaeue. M., Araki N., Comer J. 若者が保護者に対して、自分の言動について何を秘匿あるいは開示するのかについての情報開示方略を質問紙によって調査。これまで世界各国で実施してきた質問表を日本向けに修正し、国際比較を実施することによって若者の道徳観について、文化に固有な領域と普遍的な領域を同定した。本研究の知見は、初等中等教育における情報モラル教育のカリキュラムを検討するうえでの基礎的な知見とできる。中植は質問紙の作成、分析、結果の解釈を担当。
17. 教員養成における ICT活用指導力の向上を目指した指導の評価	単	2013年3月	神戸親和女子大学教育研究センター 紀要, 9, pp. 49-56	教員養成課程において、ICT活用指導力の向上を目的として、模擬授業を取り入れた実践的なカリキュラムを156名の受講生に対して実施し、15回の受講の前後で受講生の教育の情報化についてのイメージがどのように変容するのかを測定した。因子分析を行った結果、「困難さ」、「親しみ」、「重要性」、「積極性」の4因子が抽出された。各因子の合計得点について、事前・事後調査の違いは、すべての因子について有意であり、当該実践において「困難さ」が減少するとともに、「親しみ」「重要性」「積極性」が増加するという好ましい変化がみられた。
18. 教員養成における ICT活用指導力育成と活用意欲に着目した評価	単	2013年3月	神戸親和女子大学児童教育学研究第32号、教育専攻科紀要第17号合併号, pp. 93-115	S女子大学の小学校教員養成課程で学ぶ大学生の、ICTを活用した指導に対する意欲を高め、ICTを活用した指導の意義や方法についての理解を深めることを目的として、実践的な内容で構成された授業を実施した。授業後に学生のICT活用に対する意欲についての評価を実施したところ、講義、模擬授業ともに意欲を高めたという結果となった。講義においては、実際の授業を題材にした授業分析を通してICTの活用方法を学んでいくことがICT活用の意欲向上につながるということがわかった。模擬授業では、授業者の立場だけでなく、学習者の立場からICT活用を体験することが意欲の向上につながるということが認められた。
19. 自由言語連想調査による初年次生の大学生と所属大学に対するイメージの考察	単	2013年3月	神戸親和女子大学研究論叢, 46, pp.59-71	初年次生を対象に自由言語連想課題を実施し、大学生、所属大学に対してどのようなイメージを有しているのかを調査した。三週間のインターバルにおいて連想語の総数の増加は有意であった。大学生については語数・語の種類数ともに増加した一方で、所属大学については語数のみ増加し、語の種類数にはそれほど変化がなかった。大学生にのライフスタイルや人物像についての連想語が増加しており、具体的な大学生像が形成されはじめていることが確認できた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
20. 保育士・幼稚園教諭養成のための学習支援SNSの構築と運用	共	2009年5月	教育システム情報学会研究報告, 24(1), pp, 52-55	所属大学については、環境やカリキュラムについての連想語が増加しており、大学の周辺環境や学内の施設などが所属大学に対するイメージの形成に関連していることが明らかになった。 太田和志, 中植正剛, 鴨谷真知子, 鶴宏史。保育士・幼稚園教諭を目指す学生の実習支援を目的としてSNSによる学習コミュニティを開発した。本稿ではその開発プロセスとともに、ログを分析してシステム運用の状況を述べた。中植はSNSの構築と運用、ログ収集と分析を担当。
21. Practices in Japan of moral dilemma education based on Kohlberg's theories: the development and practice of moral dilemma educational materials	共	2009年3月	神戸親和女子大学大学院研究紀要, 5, pp. 1-6	荒木紀幸, 中植正剛, 山根耕平。コールバーグの理論を用いたモラルジレンマ教材について、過去20年間で活用された教材を評価・総括。教員養成における情報モラル教育の指導や情報モラル教育の教材開発に資する基礎資料を提供するものである。中植は教材の整理および評価を共担。
22. 大学における情報教育の再構築に向けた対面型ユニット制自立学習eラーニングによる基礎情報科目の展開	単	2008年4月	神戸親和女子大学教育研究センター紀要, 4, pp. 73-85	大学初年次生に対して基礎情報技能テストと情報教育に関する質問紙調査を実施した。2007年度から筆者を含むeラーニング基礎演習ユニットが全学的に導入した対面型ユニット制自立学習eラーニングの効果が確認できた。
23. SNSを用いた保育士・幼稚園教諭養成のための授業SNSの構築と運用	共	2007年4月	情報コミュニケーション学会誌, 3(2), pp. 25-28 (査読有)	太田和志, 中植正剛, 鴨谷真知子, 鶴宏史。保育士・幼稚園教諭を志望する学生の実習支援を目的としてソーシャルネットワーキングサービス(SNS)を構築して、投稿のログを分析した。実習の事前指導より運用を開始した。学生が実習中も継続してSNSを活発に活用して学び合いを進めている様子が確認され、SNSが実習支援に有効なメディアであることが確認できた。中植はSNSの構築、投稿のログ収集と分析、論文校正を担当。
24. LMS Moodleを使用した対面授業の質の向上に向けて	単	2006年3月	神戸親和女子大学研究論叢, 40, pp.11-27	大学の教員養成課程の授業において、eラーニングの運営システムであるLMSのMoodleを利用した対面授業を実施した。LMSの活用によって予習・復習を支援できたとともに、欠席者の自学自習を促すことが確認できた
25. Askplorer: Learn How to Learn	単	2003年6月	Stanford University, Learning, Design and Technology.	アスクプローラーは、高校生を対象とした、ビデオクリップを使って探求のスキルを学ぶウェブベースのソフトウェアである。その特徴はビデオクリップに別のビデオクリップを重ねて表示するVideo on Videoという技術にある。本論文では、ソフトウェアに対するニーズ分析やインフォーマントデザインによる開発のプロセス、ソフトウェアの効果についての調査結果を掲載している
26. Beyond the Teaching of Technology: Findings from One Teacher's Classroom	共	2002年12月	Apple Learning Interchange, 2002, Apple	Masataka Nakau, Caleb Cheung, and Jane Cote. カリフォルニア州オークランドのBret Harte Middle Schoolで行われているDigital Photo Essayという授業を対象にした質的調査。National Board Certificationの資格をもっている担当教師がどのようにデジタルメディアを授業で活用しているのかを明らかにすることを目的に実施。デジタルメディアを道具として有効活用するために「生徒の創造性の刺激」「コミュニティづくり」「生徒の自己アイデンティティの育成」などの要素が授業に取り入れられていることが明らかになった。研究計画立案、データ収集、分析、執筆など、研究の全てに関わったため担当箇所抽出不可。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. Structural Equation Modeling of Perceived Ability in Media	共	2024年3月	Proceedings, 12th International Conference on	Nakaue M., Moriyama J. 日本の高校生のメディア情報リテラシーとデジタルコンピテンシーの能力感の構造モデルの構築と検討を行うことで、生涯学習の観点からこれらの能力を効果的に学ぶための実践授業をデザインするための指導仮説を得た。先行研究で開発し

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
and Digital Literacy among Japanese High School Students			Information and Educational Technology (ICJET), IEEE (査読有)	た自己評価尺度を用いて、日本の高校1年生710人を対象に、MILとDigCompに対する能力感と学習意欲の調査を行った。探索的因子分析の結果、MILとDigCompの能力感として7因子が抽出された。共分散構造分析によって因子間の因果関係を同定したところ、メディア・リテラシーに関する社会科学系と、デジタルコンピテンシーに関するデジタルスキル系の2つのセグメントが存在することがわかった。能力感の構造の因果関係から、1. 情報の影響と法令・ルール系、2. 情報の多面的・吟味的評価系、3. デジタルスキル系、の3つの学習課題を設定することが、学習者にとって一貫性を感じやすいカリキュラムになるのではないかという指導仮説を立てることができた。中植は、研究の計画、調査の実施と結果の分析、論文執筆を担当。
2. 高校生版メディア情報リテラシー自己評価尺度の開発	共	2023年3月18日	日本産業技術教育学会第38回情報分科会研究発表会	中植正剛, 森山潤。ユネスコのメディア情報リテラシー (MIL) の構成概念を用いて日本の高校生向けに高校生版MIL自己評価尺度を開発し、その妥当性と信頼性を検討した。本尺度を用いて高校生がメディア情報リテラシーを自己評価することで、自らの学習課題を把握し将来に向けて継続的にデジタルコンピテンシーを向上させることが期待できる。中植は、研究の計画、調査の実施と結果の分析、論文執筆を担当。
3. 遠隔授業に見る学生教員間の認識ギャップ	共	2021年3月	第27回 大学教育研究フォーラム	間瀬泰尚, 中植正剛, 酒井 純, 辻川典文。全国的な新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、神戸親和女子大学では2020年4月より全面遠隔授業を実施した。学生・教員双方にアンケート調査を実施し、その結果のうち、学生教員間の認識ギャップに焦点をあてて分析を行った。中植の担当は研究計画の立案、調査用質問紙の開発、調査の実施、チームメンバーと共に結果の分析の検討。
4. 兵庫県における教員のICT活用指導力向上を図る研修プログラムの構築(2) 研修コンテンツの開発と試行的実践	共	2018年9月	日本教育工学会第34回全国大会	中植正剛, 竹田和恵, 小森真一, 森山潤。兵庫県における教員のICT活用指導力向上を図るために、平成27年度から平成29年度にわたり、県内の教員養成課程を有する3つの大学、兵庫県立教育研修所、小・中・高・特別支援の各校種の実証校と共に「教員のICT活用指導力向上のための研修プログラム策定事業」を推進した。第1報では、事業の概要および兵庫県版のオンライン研修システムの開発について報告したが、本発表では、当該システムで提供されている研修用コンテンツの開発とそれを活用した教員養成課程における試行的取り組みについて報告した。中植の担当は、チームメンバーと共に研修コンテンツの開発と検討、教員養成における試行的実践、論文執筆と発表。
5. 兵庫県における教員のICT活用指導力向上を図る研修プログラムの構築(1) オンライン校内研修支援システムの開発	共	2018年9月	日本教育工学会第34回全国大会	竹田和恵, 中植正剛, 小森真一, 森山潤。兵庫県における教員のICT活用指導力向上を図るために、平成27年度から平成29年度にわたり、県内の教員養成課程を有する3つの大学、兵庫県立教育研修所、小・中・高・特別支援の各校種の実証校と共に「教員のICT活用指導力向上のための研修プログラム策定事業」を推進した。本発表では、本事業の背景および目的、事業推進の工程および兵庫県版のオンライン研修システムの開発について報告した。中植の担当は、チームメンバーと共に研修コンテンツの運営システムの検討と修正、論文の確認。
6. Japanese Adolescents' Justifications and Strategies for Nondisclosure to Parents and Their Association With Depressed Mood	共	2014年3月	Bi-annual meeting of the Society for Research on Adolescence. Society for Research on Adolescence (査読有)	Jessamy E. Comer, Larry Nucci, Judith G. Smetana, Noriyuki Araki, Masataka Nakaue。日本の高校生を対象に、親への情報開示方略とその理由が抑うつ気分や問題行動に与える影響を調査した。親からの失望や否定を恐れるという理由づけが、個人的、多面的な問題において特に強い抑うつ気分と問題行動に関連していることが明らかになった。また、親に尋ねられた場合にのみ情報を開示する方略は、問題行動の減少と相関があり、親に嘘をつくという方略は、多面的な問題において抑うつ気分の増加と関連していることが明らかになった。中植の担当は、チームメンバーと共に、日本版の質問紙の開発、調査の運営、分析結果の検討。
7. 教員養成における実践的カリキュラムによる大学生の教育の情報化イメージの変	単	2012年3月	情報コミュニケーション学会第10回全国大会	教員養成課程において、ICT活用指導力の向上を目的として、模擬授業を取り入れた実践的なカリキュラムを実施し、受講前後で受講生の教育の情報化についてのイメージがどのように変容するのかを測定した。因子分析を行った結果、「困難さ」、「親しみ」、「重要

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
化				性」, 「積極性」の4因子が抽出された。各因子の合計得点について、事前・事後調査の違いは、すべての因子について有意であった。
8. 総合的な学習の時間におけるグループ・モデレーション法を用いた情報活用能力評価基準の開発	共	2010年11月	第36回全日本教育工学研究協議会全国大会上越大会	細見隆昭, 芦田繁昭, 中植正剛, 細見真由子, 氷上情報教育研究会。小学校の総合的な学習における情報教育に資する評価基準を, グループ・モデレーション法を用いて筆者らで開発した。中植の担当は, チームメンバーとともに, 各学年の評価基準の開発。
9. Go Math! How Research Anchors New Mobile Learning Environments	共	2010年10月	6th IEEE International Conference on Wireless, Mobile, and Ubiquitous Technologies in Education (査読有)	April Alexander, Kristen Blair, Shelley Goldman, Osvaldo Jimenez, Masataka Nakaue, Roy Pea, Andrew Russell. 米国において, 中学生レベルの数学を日常的なかで活用するために, 携帯電話向けにGo Mathというアプリケーションを開発した。解発にあたり, ティーンエイジャーの家庭環境における数学の利活用や家族間でのコミュニケーションの形態についてリサーチを行った。本稿では, アプリケーションの開発に際してリサーチで得られた知見がどのように応用されたのかに焦点があてられている。中植の担当は, チームメンバーと共同して, リサーチ結果の知見の検討, アプリケーションの計画策定, プラットフォームの選択, プロトタイプの開発。
10. Practices in Japan of Moral Dilemma Education Based on Kohlberg's Theories.	共	2008年11月	34th Annual Conference of Association for Moral Education (査読有)	荒木紀幸, 中植正剛, 山根耕平。日本におけるモラルジレンマ教育で活用されてきた教材の紹介と, コールバーグによる道徳性発達を背景とした教材開発プロセスについて発表荒木紀幸, 中植正剛, 山根耕平。日本におけるモラルジレンマ教育で活用されてきた教材の紹介と, コールバーグによる道徳性発達を背景とした教材開発プロセスについて発表。中植の担当は, 教材の整理・英訳, 発表資料の作成, 当日の発表。
11. プロジェクトチームによる授業方法の改善(2) コミュニケーションツールのログ分析		2008年10月	日本教育工学会第24回全国大会	高橋朋子, 寺谷愉利子, 山崎瞳, 東郷多津, 望月紫帆, 中植正剛。私立大学の一般目的の英語の授業における多様な学生に対応する授業に適した新たな教育技術を, 複数の大学の教員からなるプロジェクトチームで, ウェブ上のコミュニケーションツールを用いて開発した。ツールのログを分析によって, 円滑な開発プロセスについての検討を行った。課題の明確化と課題に対する合意形成を図る第一段階では「問題提起」と「情報提供」を支援する役割の重要性が確認され, 協働での成果が期待される第二段階では「意見整理」「応答促進」「依頼・要請」の役割の重要性が確認された。。中植の担当は, チームメンバー共に, ウェブ上のコミュニケーションツールを用いた教材・授業開発。
12. 保育士・幼稚園教諭養成におけるSNS活用に関する研究(2)	共	2008年5月	日本保育学会第61回大会	鶴宏史, 太田和志, 中植正剛。筆者らの開発したSNSへの実習中の書き込みを分析した。悩みは多い順に, 責任実習, 子どもとの接し方, 実習日誌に関するものであった。悩みに対し, 他の学生からコメントがあり, それは大きくアドバイス(知識の提供)と共感的コメントに分けられた。それに対してお礼のコメントと決意のコメントが返っていた。このことから当初の目的である学生相互の支援ができる環境を実現できたと考えた。中植の担当はSNSの構築, 運用, ログの抽出, 書き込みの分析についての協議。
13. 保育士・幼稚園教諭養成におけるSNS活用に関する研究(1)	共	2008年5月	日本保育学会第61回大会	太田和志, 中植正剛, 鶴宏史。保育実習・教育実習中における不安解消および学びの場として, 同じ進路を希望する実習生, 実習担当教員, 現職の保育士幼稚園教員が, それぞれの立場を超えて共に学びあうことができる学びの場を, SNS プラットフォームを用いて, プロトタイプを開発し, その運用について報告した。中植の担当はSNSの構築, 運用, ログの抽出, 書き込みの分析についての協議, 発表原稿の校正。
14. 英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発(3) - 学生の学習過程から -	共	2007年11月	日本教育実践学会第10回研究大会	東郷多津, 望月紫帆, 高橋朋子, 中植正剛, 山崎瞳。私立大学の一般目的の英語の授業は, 多様化する社会のニーズと多様化する学生の間で, 常に学習の質と学生の能力とクラス数とのバランスを模索しなければならないが, 多様な学生に対応する授業に適した新たな教育技術をプロジェクトチームで開発していくアプローチが重要である。プロジェクトチームで開発している再履修生のための英語の授業の中で, 単位を取得した学生の学習プロセスに着目し, 開発し

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
15. プロジェクトチームによる授業方法の改善～コミュニケーションツールのログ分析～	共	2007年9月	日本教育工学会第23回全国大会	た授業と学習教材の効果と問題点を検証した。中植の担当は、チームメンバー共に、ウェブ上のツールを用いたメタファーの考案、学習マップと教材の開発、分析結果の解釈の確認。
16. 英語を学習する意味が見いだせない学習者のための自律学習の開発方法(2)－「学習マップ」の導入効果と問題点－	共	2007年8月	日本リメディアル教育学会第3回全国大会	高橋朋子, 中植正剛, 山崎瞳, 東郷多津, 望月紫帆。私立大学の一般目的の英語の授業における多様な学生に対応する授業に適した新たな教育技術を、複数の大学の教員からなるプロジェクトチームで、ウェブ上のコミュニケーションツールを用いて開発した。ツールのログを分析することで、ネットワークツールを活用した共同開発プロセスの望ましいあり方を検討した。中植の担当は、チームメンバー共に、ウェブ上のツールを用いた学習マップと教材の開発。
17. SNSを用いた保育士・幼稚園教諭実習支援コミュニティ「こどコミュ」への投稿分析と考察	共	2007年4月	情報コミュニケーション学会第2回研究会	東郷多津, 望月紫帆, 高橋朋子, 中植正剛, 山崎瞳。私立大学の一般目的の英語の授業における多様な学生に対応する授業に適した新たな教育技術を、複数の大学の教員からなるプロジェクトチームで開発した。学習者の自律的学習を促すために開発されたビュッフェのメタファーを適用した学習マップについて、その効果と課題を検討した。中植の担当は、チームメンバー共にメタファーの考案、学習マップと教材の開発。
18. SNS をプラットフォームとしたオンライン学習コミュニティの開発－保育士・幼稚園教諭および実習生の学びの場－	共	2007年2月	情報コミュニケーション学会第4回全国大会	中植正剛, 太田和志, 鴨谷真知子。保育士・幼稚園教諭をめざす学生の実習支援のために、SNSを活用した学習支援コミュニティを構築した。本稿では、ユーザーである学生によってなされた投稿の内容を分析して、SNSでどのようなコミュニケーションが行われたのかを分析した。学生同士の精神的な相互支援や実習内容に関する認知的な相互支援とともに、意欲や成功の共有が確認できた。中植の担当は、SNSの構築と運用、投稿内容の抽出、コミュニケーションの分析。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. プレコンファレンス「初等教育におけるプログラミング教育」	単	2016年8月	教育システム情報学会第41回全国大会	学会のプレコンファレンスとして、現職教員等4人で、新学習指導要領で小学校に導入されることが決まったプログラミング教育で育む資質・能力と実践事例について討論を行った。中植は自分のパートで初等教育におけるプログラミング教育の意義と教員養成・教員研修における取り扱いについて発表。
2. 教員養成の新視点（翻訳）	共	2015年12月	晃洋書房	山根耕平、隈元泰弘、新茂之、宮崎宏志、中植正剛。これからの教師はどうあるべきか、これからの教師をどう育てるか。生徒の学びの過程、双方向的な授業の探求、生徒との関係の構築など、困難な課題の解決をめざし、現場で成長するカナダの教師たちの提案からまとめられた、教員養成の7つの優先事項を問う。第5章、第6章担当。
3. 道徳性発達と道徳教育についての伝統的な考え方に対する挑戦	共	2009年3月	道徳性発達研究, 4(1), pp.11-20	Larry Nucci, 中植正剛。カリフォルニア大学バークレー校のラリー・ヌッチ氏の論文翻訳。道徳教育について、道徳性と社会的習慣との区別を強調する社会的認知領域論からのアプローチを記述。
4. ワークショップをめぐる小中学校の現状	単	2004年1月	特別非営利法人CANVAS, 総務省	CANVASが今後国内でワークショップを展開するにあたって、テクノロジーを活用したワークショップに対する国内の公立小学校・中学校の考え方や実態を調査した。
5. スタンフォードLDTに学ぶ（連載11本）	単	2002年11月～2003年9月	学研、New教育とコンピュータ, 2002年11月号～2003年9月号	スタンフォード大学教育学大学院 Learning, Design and Technologyプログラムのカリキュラムや研究内容、シリコンバレーのテクノロジーと教育に関する最新情報などを紹介。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 作品の共有を目指して	共	2001年3月	New教育とコンピュータ 2001年2月号, 学研, pp41-43	中植正剛, 伊佐芹延子。同志社国際中学高等学校で開発したレポート共有システムを活用した授業実践の発表。データベースは、グループワークで作成したレポートとそれに対するコメントを共有できるようになっている。中植の担当は研究計画の立案, オンラインデータベースの開発, 実践授業の補助, 原稿執筆。
7. 読書感想文を共有で見つける 君にぴったりの本	共	2001年3月	New教育とコンピュータ 2001年3月号, 学研, pp. 44-46	中植正剛, 小川サラ。同志社国際中学高等学校で開発した読書感想文オンラインデータベースを活用した授業実践の発表。利用者である英語科教員とインフォーマントデザインの手法を用いて開発。中植の担当は研究計画の立案, オンラインデータベースの開発, 実践授業の補助, 原稿執筆。
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2022年12月～現在	日本産業技術教育学会
2. 2022年11月～2024年3月	丹波市教育委員会「ICT活用プロジェクトチーム」委員長
3. 2022年6月～現在	日本デジタル・シティズンシップ教育研究会 特別委員
4. 2021年7月～現在	日本教育情報学会
5. 2020年4月～2022年3月	丹波市教育委員会「ICT活用プロジェクトチーム」委員長
6. 2019年4月～2022年3月	兵庫県教育委員会「兵庫県版プログラミング教育スタートバック構築事業」連絡協議会委員
7. 2019年4月～2021年3月	神戸市立摩耶兵庫高等学校 学校評議員
8. 2018年4月～現在	神戸市立科学技術高等学校 学校評議員
9. 2018年4月～2022年3月	丹波市プログラミング教育プロジェクト会議委員長
10. 2018年4月～2019年3月	兵庫県教育委員会「プログラミング教育推進モデル構築事業」連絡協議会委員
11. 2017年9月～2022年3月	International Association of Lab Schools, International Tour, 共同ディレクター
12. 2017年4月～2018年3月	兵庫県教育委員会「教員のICT活用指導力向上のための研修プログラム活用推進事業」連絡協議会委員
13. 2016年4月～2017年3月	兵庫県教育委員会「教員のICT活用指導力向上のための研修プログラム策定事業」連絡協議会委員
14. 2016年3月～5月	神戸市「マイナンバー支援コンサル決定のための選考委員」
15. 2014年4月～2020年3月	兵庫県立尼崎高等学校 学校評議員
16. 2014年4月～2018年3月	大学コンソーシアムひょうご神戸 国際交流委員会委員
17. 2014年4月	神戸市「社会保障・税番号制度対応支援業務に係る公募型プロポーザル」事業者選定外部委員
18. 2009年6月	スタンフォード大学教育大学院 LDTプログラム LDT Expo レビューアー
19. 2007年9月～現在	情報コミュニケーション学会
20. 2005年7月～現在	日本教育工学会
21. 2002年2月～現在	特別非営利法人CANVASフェロー
22. 2001年4月～現在	教育システム情報学会